

茅野市八ヶ岳通信

尖石考古館

尖石遺跡の整備

—遺跡の追加指定へ—

尖石遺跡は昭和27年に特別史跡に指定され、今日まで大切に保存されてきました。そして近年になって、この特別史跡地をしっかり整備して後世に残そうという考えが高まってきた。遺跡地の大部分は地主の方々の協力で市有地となり、具体的な整備を計画することができるようになりました。



特別史跡追加予定地

縄文時代のムラの様子を考えてみると、ムラの中央に共同の広場を作り、その周りに家々を建て、近くには役に立つクリやドングリなどの食糧や、またせんいなどがとれる植物を大事に残して管理していたのではないでしょうか。そしてその外側が落葉樹の原生林になっていて、そこで狩猟や採取をしていたと思われます。このように考えますと、現在の特別史跡地42,000m²だけの遺跡整備では狭すぎます。そこで地主の方々の協力を得て、特別史跡地の北側、与助尾根周辺一帯の約23,500m²を特別史跡地として追加指定の申請をしました。

尖石遺跡に隣接し、昨年開所した「青少年自然の森」を含めて尖石遺跡一帯が保護されますと、将来、縄文人の生活範囲を含めた史跡の整備ができる可能性が高くなっています。

一方、専門の学者を招いて、遺跡の整備をどのようにしたらよいかの指導も受けています。「特別史跡」らしい整備のためには、しっか

り遺跡を調査して科学的に間違いない縄文時代のムラを復元すること、その時代の植生を再現すること、見学に来た人たちが縄文時代の雰囲気に没入るように、また調査研究の姿も見学できるように、など先生方から多くの意見をいただいている。

ムラの周囲を縄文時代の落葉樹の原生林のように変えていくことなど、とても一朝一夕にできることではありませんが、しっかりした計画のもとに遺跡整備を進めていきたいと考えています。

遺跡の試掘 3年目

故宮坂英式先生は、昭和5年より13年間にわたりて尖石遺跡の発掘を続け、日本で初めて縄文時代のムラについての画期的な研究を行ないました。けれども、尖石遺跡がどのようになっていたか、ムラの広がりその他、宮坂先生が調査していなかった点を調べないとしっかりした遺跡整備ができません。今年は東側がどの辺まで続いているか、中央部はどのようになっているかの調査を行なっています。これまでに家の跡や、縄文の人たちが活動した跡が見つかっています。



尖石遺跡の試掘

いろいろな布の原料

—民俗資料収蔵品展開催— 10月17日(土)～11月3日(火)

本年度の民俗資料収蔵品展は、「布を織る」のテーマで開催します。布を織りあげるまでの一連の工程—糸作り・染め・はた織り—の技術を紹介し、それに関する資料を展示します。

そこでこれらの内容から、いろいろな布の種類と、それらの原料となる植物などを紹介します。



ワタの実

○綿布（木綿）—原料：ワタの種子の綿毛

ワタはアオイ科の1年草です。「棉」とも書きます。種子についている柔らかいせんいを紡いで綿糸を作り、これを織って綿布にします。

ワタは江戸時代には米とならぶ重要な農産物でしたが、暖かい地方でよく育つ植物であるため、諏訪地方ではほとんど栽培されなかったようです。現在日本は、全て外国産の綿を輸入して使っています。



アサの収穫風景 (写真提供 美麻村役場)

○麻布—原料：タイマ（アサ）の茎

タイマはアサ科の1年草です。たんにアサとも呼ばれます。茎の皮を細くさいて、はしとはしどとを絡み合わせる「麻績み」をして麻糸を作ります。これを織って布にします。糸にする皮をとったあとの茎は「おんがら」と呼ばれ、かやぶき屋根などに使いました。

諏訪地方でも昭和20年代までは、多くの農家が作っていました。しかし、花や葉の液から麻薬ができるため、現在では県知事の許可を受けないと栽培できません。

○葛布—原料：クズのつる

クズはマメ科の多年草です。土手や裸地に自生する、つる性の植物です。このつるを発酵させ、水中で洗って皮を除き、細くさいて糸にしたもので葛布を織りました。

「葛粉」は、根の太い部分をつぶし、水にさらしてとったデンプンです。



シナノキ

○科布—原料：シナノキの木の皮

シナノキはシナノキ科の落葉高木で、北海道から九州にかけて山地に自生しています。

樹皮を薄いテープ状にはいで、さらに細くさき、「科績み」をして糸にします。

「信濃国」は古くは「科野国」と書きました。この由来は、シナノキが多くはえていたからだという説もあります。諏訪地方でも昔は布を織るために利用されましたが、戦後の植林で切られるなどして、現在ではありません。

○絹布—原料：カイコのまゆ

「おかいこさま」は、カイコというガのなかもの幼虫です。この幼虫は、1匹が1500～2000メートルものタンパク質の糸をはきだしてまゆを作り、その中でさなぎになります。絹糸は、まゆを煮て1個から1本づつ糸を引き出し、これを数本よりあわせて作ります。

○毛織物—原料：メンヨウ（羊）の毛

羊の毛を刈り、きれいに洗います。これをときほぐし、すきをかけて紡いだ糸を紡毛糸と言います。紡毛糸を織って毛織物を作ります。～このように、1本の糸を作るだけでも大変な手間がかかります。今回の特別展には、はた織りだけでなく糸作りの体験コーナーもあります。～

蓼科の洋画家展（Ⅲ）

山と高原の心象風景——「田村一男展」

7/19～8/20

～企画展を終えて～



▲田村一男氏 会場にて

田村一男氏は明治37年東京生まれ。現在芸術院会員で光風会理事長、日展顧問です。日本の風土がつくり上げた山と高原の風趣といったものを一貫して追い求め、日本人としての洋画を確立した画壇の重鎮といえます。

氏は、岡田三郎助が主催する本郷絵画研究所で知り合った茅野市出身の彫刻家、矢崎虎夫氏に誘われ、大正14年、蓼科高原を訪れ、雄大な八ヶ岳に魅了され、画家としての道を歩みはじめました。

昭和3年、帝展初入選の茅野市駅付近を描いた「赤山の午後」、昭和21年の日展特選「高原初秋」など当地で取材された作品が数多くあります。今回は、蓼科ゆかりの作品を中心に信州を題材としている油彩画39点を展示しました。

現代作家の多くが、絵の対象を追求すれば追求するほど、構成的にも複雑で装飾的になります。これに対して田村作品は、単純化された線と、モノトーンを主体とした日本画に近いマチエールからなる清澄な心象風景に特徴があるといえます。朴訥としてそっけなくくらい明瞭に、「海景型M」という横長のキャンバスに山の稜線のみが走る作品さえあります。

この夏、現代音楽の旗手として活躍したアメリカの作曲家ジョン・ケージ氏が亡くなりました。代表作にピアニストが登場し、何も演奏しないで退場する「4分33秒」という作品があります。音の無い状態、「沈黙」を「音楽」として認識させた実験といわれています。画家に照らしてみると、過剰な表現を避け、省略してい

く作業といえます。

田村氏の描く高原は人気のない、夏から秋へのどんより曇った空がよく登場します。「この方は山を描いている様に見えるけれど、空を描いている作家ですね」と来館されたあるご婦人が言いました。そのことを田村氏にお話しすると「僕の作品をよく見ているなあ」と言われました。

西洋の伝統的な技法にとらわれず、熱い自己主張といったものを排し、“自然界や外界で発生するあるがままの音に聴き入ろうとする姿勢”^④を一見共通しないように見える、画家の姿にも感じました。

④「ジョン・ケージ氏を悼む」一柳 慧(朝日新聞平成4年8月14日)

作品紹介



「白樺湖畔冬景」 田村一男

油彩 F20号 昭和57年制作

平成元年1月、奈良県立美術館で開催された「今日の山水三人展」では日本画の村上華岳・小野竹喬らとともに、油彩画でありながら「山水」として田村氏の作品が評価されている。

抑制の利いた色使いと、日本画の顔料を含ませた絵肌から、最も日本のな“無垢な自然”というものが表出されている。

企画展入館者は市内697(47.7%)、市外296(20.2%)、県外469(30.1%)で計1,462名でした。

諏訪大明神画詞 (長野県宝)

4月25日から5月31日まで行われた企画展「守矢文書にみる中世の御柱」で一部分紹介したこの書は、守矢文書のうちの1つで、活字にもなっておりよく知られています。

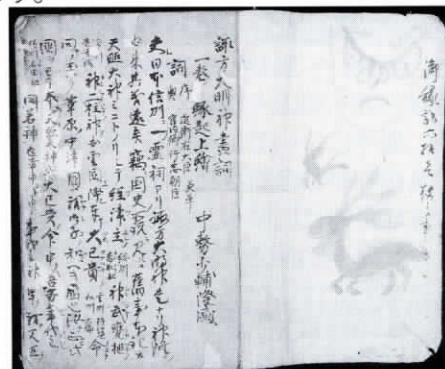
これが作られたのは、室町時代の初期の延文元年（1356）、約650年前です。守矢文書で一番古いのは建久3年（1192）の下文で、約800年前です。これより古いものはありません。

画詞の中には神代以来の古い事が書かれており、先代旧事本紀（旧事本紀、旧事紀）、日本書紀（日本紀）などが引用されています。旧事紀は平安初期（約1200年前）、日本書紀は奈良時代（約1270年前）の編纂です。

写真は開巻第1頁第1段で、「夫レ日本信州ニ一ノ靈祠アリ諏訪大明神是ナリ神降ノ由来其義遠矣、竊ニ国史ノ所説ヲ見ルニ旧事紀云」とあります。旧事本紀を引用していることがわかります。第4段には「用明天皇御守、蘇我馬子大臣ニ仰セテ今ノ先代旧事本紀十巻ヲ撰セラル、第三ノ巻ニハ専ラ当社明神ノ本縁分明ナリ」とあります。ただし、旧事本紀が用明天皇の時に

撰せられたとあるのは誤りで、平安初期の作であるという現在の定説です。

画詞を作ったのは小坂（諏訪）円忠です。これを作ったきっかけは、諏訪神社にもともと諏訪社祭絵という絵巻物があったのですが、円忠のころにはすでに紛失していたので再興しようとしたのです。当初は絵巻物として完成されたのですが、いつの間にか本物はなくなり、文明4年（1472）に僧宋詢がことばだけ写しておいたものが、今に残っているわけです。絵巻物が伝わっていれば、超国宝級のものと言われています。



これから開催します

＜八ヶ岳総合博物館＞

民俗資料収蔵品展「布を織る」

…10月17日(土)～11月3日(火)

古文書解読講座…10月18日・11月1・3・8・15・22・29日・12月6・13日
日曜・祝日の9日間 午後3時から

10月のロビー展「布を織る」（はた織りを体験できます）…10月17・18・24・25日
午前10～12時・午後1～3時 体験の場合は材料費（500円以内）が必要

第4回市内小中学校 研究・創意工夫展

…11月29日(日)～12月13日(日)

各小中学校ごとに募集した、研究や工作・絵画など約300点を展示

冬の探鳥会…12月13日(日)

諏訪湖の横河川河口付近で、カモの仲間やコハクチョウなどを観察

※博物館は、月曜日と祝日の翌日が休館日です。なお、11月25・26日は臨時休館します。また、特別展やロビー展は、平常入館料で見学・参加いただけます。

＜尖石考古館＞

縄文土器製作教室

- ・野焼き…10月18日(日)
- ・作品展示…10月20日(火)～10月25日(日)

＜美術館＞

第12回茅野市小中学生作品展

- ・絵画の部…11月6日(金)～11月25日(水)
- ・書写の部…1月24日(日)～2月10日(水)

火燐会展（絵画サークルの作品展）

…11月29日(日)～12月6日(日)

茅野市の博物館だより 八ヶ岳通信 No.7

発行年月日 平成4年10月15日

編集・発行 茅野市八ヶ岳総合博物館

〒391-02 茅野市豊平6983番地

TEL. (0266) 73-0300

茅野市尖石考古館

〒391-02 茅野市豊平4734-132

TEL. (0266) 76-2270

茅野市美術館

〒391 茅野市玉川500番地

TEL. (0266) 73-5440

茅野市神長官守矢史料館

〒391 茅野市宮川1389番地の1

TEL. (0266) 73-7567